

北河内地域における生活環境と再構成に関する 環境デザイン原理的研究

Research on Man-environment and Environmental Design in Kitakawachi Region

主任研究員：谷口興紀

分担研究員：植松曄子、星野暁、榊原和彦、中川等、川口将武

環境デザインの「環境」という語句の外延は、われわれを取り巻くもの凡て、われわれを中心として広がるものを意味する。われわれを「取り巻くもの」は、第1にわれわれを原点としてわれわれの外に空間的に広がるものとしてイメージされる。第2に時間的に広がるもの、すなわちわれわれの過去・現在・未来がある。第3にわれわれが意識しないもの、または意識に上らないものも含むと考えねばならない。これらが、環境に関わる立場の論理により、何らかの限定を設け、有限化される。このことは、本来渾然一体的なものを、限定領域の内なるものと外なるものとに分けることを意味するが、このように分けられたからと言って、「現実」が截然と分けられるわけではない。「環境」をデザインしようとする場合、常にこの点に立ち戻る必要があり、このことを「環境デザイン規則03」として定立する。

計画の領域外、計画意識の外まで視野に入れることは、計画遂行を不可能にすると思われるかもしれないが、それらが計画を取り巻く壁として当該地域の計画相をとって現れると考えることにより計画可能である。例えば、榊原研究は、「生駒山地」という北河内地域の東の境界領域に焦点を当て地質学的な超長期的過去にさかのぼる「生駒石」を取り出し、中川研究は、北河内地域の西の境界領域である淀川の「船宿」である19世紀初期の建物「鍵屋」を取り上げ、保全・修復・再生・活用について論じる。北河内地域の外の領域としての大和または奈良と大阪市から北河内地域を見て、榊原研究は「旧街道ネットワーク」と非日常生活としての「参拝」「行楽地」に焦点を当て、中川研究は、河内・大和一帯における特徴をもつ民家として、明治10・CE1877年頃の建物「中塚家」を取り上げる。

植松研究の「丹波布」は、北河内地域外の丹波地方にまで足を伸ばし、それが河内木綿と同様に、江戸中期から盛んになり、産業革命以来の技術体系に基づく紡績工場の発展により、明治末期に衰退したものであるが、その衰退の契機は市場経済的競争原理である。しかし、近年、市場経済原理の反省として自然を無限と措定することが指摘され、非市場経済（地域経済）という観点から地域通貨の導入という動きがある。これは、あらゆる物を、人為的に自然から切り離し単一なグローバルな経済的価値で計ってしまうのではなく、物によって、自然と結びつけ、自然の時間を備えた尺度で、その価値を計ることを意味する。このことは、使用価値を空間的・地域的に限定することにより、地域の固有性を担保し、広義の経済を2重化することにより、地域の生活に多様性と冗長性を与えることに通じる。多様性を現在から未来に伝えるものとして、法人的「伝承館」の設置が提案されている。

星野研究は、環境オブジェ作品を、外からその場所に運び込むという設置の仕方ではなく、場所そのものを作り上げるという作品の現実化された力を、A. ゴームリーに読み取り、環境デザインのあるべき一つの方向を示唆する。

谷口研究は、環境デザインの持続可能性を、新しい時間単位を導入することにより高めるという提案である。これは、環境問題の時間的広がりからの反省から来る。

川口研究は、内なる自然としての身体を外なる自然である「緑環境」に接続させる契機となる「歩行ルート」の新たな設定に取り組んだものである。このテーマは、人工的システムでシミュレーション可能な、自然の中の人工化された道（ウェイ）において、自然の時間を人工的に疾走させる（ドライブ）いわゆるドライブウェイの設定とは異なり、内なる自然を自然の時間のままに、外なる自然の中に置くことを目指すものであり、当然そこでは、非人工的時間に則ることによる生活の時間的2重化が志向されている。

このように見てくると今年度（平成15年度）のキーワードは「2重性」－空間的2重性、経済的2重性、時間的2重性－である。

北河内地域7市の都市計画書と地理情報データに関する研究

谷口興紀（工学部）

本年度作業の内、大東市都市計画書「いきいき安心のまち・大東市 第4次大東市総合計画 基本構想・第Ⅰ期基本計画」（大東市市長公室企画調整課編、平成13年（CE2001）3月、以後「参照書」と呼ぶ）を分析して得た21世紀型都市計画のあり方について述べる。

20世紀が産業革命を一つの遠因とする環境問題の世紀とすると、21世紀はその解決に向けての取組を実践する世紀であるが、環境問題の解決は時間的に短兵急に出来るものではないことは、環境問題を告発している代表的成書の出版年を並べると、「沈黙の春」（1962）、「成長の限界」（1972）、「限界を超えて」（1992）、「失われた未来」（1996）であり、これを見ると人々の環境問題についての認識が深まっていると考えられるにもかかわらず、30年、40年を経ても、なお更なる告発がなされるほどその根は深く解決からほど遠い。一方「参照書」は、「希望に満ちた21世紀の最初の四半世紀余りを展望する将来像を定め、これからのまちづくりを着実に実践していくため」（14頁）のものとして将来像を、時間的に四半世紀（25年）先で限り、約一世代30年で希望に満ちたまちづくりが可能であるという構えである。つまり、30年以上の先はあまりにも遠く、想像力の及ばない事柄であり、計画としても意味のないことであるとも思われる。

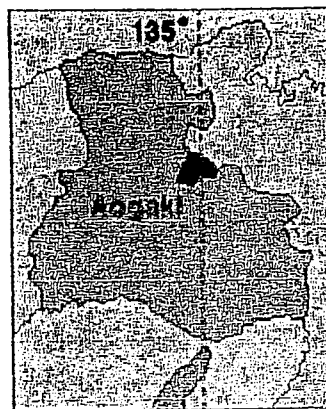
都市計画などにおいて30年というタイムスパンは、比較的一般に行われる単位であるが、計画の前提として21世紀型都市計画において採用することは適切であろうか。計画者やそれに関わる人が今までの慣習に従って単にその程度長ければ十分と思ひ、それよりも、「目標期間である30年間の長期にあつては、大きな社会経済情勢の変化や制度の変革、広域行政の大幅な進展が予想され」（「参照書」26頁）、「それにあわせ、基本構想の変更や見なおしも想定されるため、柔軟な発想と広い視野をもち、弾力的な運用を図っていく」ことに関心が向けられている。

かつて日常生活は、百分率、ときに千分率で済んでいたが、環境問題の発生と共に、百万分率（ppm）という単位を導入（使用）する必要が生じ、現今では、ppmは、ほとんど日常用語と化している。21世紀型都市計画は、新しい単位の導入により特性づけられねばならない。環境時代の都市計画の単位として、30年、40年では短すぎる。「百年の計」という言い方があるように、100年3世代という単位を計画思考に導入し、あらゆるものを見直す必要がある。環境問題は、単に技術的な問題ではなく、政治・文化的な問題であり、「社会経済変動要因（高齢化、情報化、国際化等）や政策課題要因（分権化、国土構造再編）の地域における具体的表れ、関連性の明確化」（「参照書」87頁）に対処するには、100年かかる地域社会全体の「変容」を必要とする。

北河内地域の生活環境とクラフトについて

植松 曄子 (工学部)

北河内地域の代表的なクラフト、河内木綿の研究で周辺地域の拡大研究が必要とされる。昨夏、丹波布の調査に兵庫県氷上郡青垣町を訪れた。兵庫県の東北部に位置し、北は京都府に隣接し、東を市島町・山東町とそれぞれ接している地域です。丹波布は、明治末期まで丹波佐治の地で農家によって盛んに織られ愛用されて京都方面へは佐治木綿として売られておりました。この布の特徴は、先染めの糸を使って経糸で縞や格子柄を織り上げます。綿を紡いで糸を作り、栗の皮やこぶな草（田の畦などに生えている草）・山楊（やまもも、落葉高木）・榛の木（はんのき、山の湿地に生える落葉高木）



など野山にある草木で茶色や黄色・緑色に染めた糸で織り上げます。河内木綿との相違点は、色合は河内木綿が藍染めで主に藍色に対して、丹波布は茶・黄・緑とカラフルで、太い手紡ぎ糸を使い、緯糸のところどころに絹糸のつまみ糸を入れるのが特徴でプレーンな布に凹凸の変化をつけ立体的に独特の風合いをつけております。織り方はどちらも平織りで、先染めの糸を使って、縞と格子で柄を表現しています。丹波布は江戸中期から明治にかけて織られた丹波木綿のことですが、民芸家の柳宗悦が京都の朝市でこの織物を発見し、丹波布と名づけたと云われている。残念ながら当時の丹波市は現在ほとんど見る事が出来ません。

河内木綿と同様、明治時代になり洋紡糸の輸入、近郊の西脇市に紡績工場ができ零細農民は賃金労働者として働くようになり、やがて丹波布も衰退しました。

平成10年に青垣町に町の運営で開館した「丹波布伝承館」を平成15年8月訪れた。それまでは、「丹波布技術保存協会」が織作家足立康子氏を中心に毎年4～5日間、糸を紡いで、染めて、織り上げる講習が行われていた程度であったが、青垣町では丹波布の技術を伝えていくために、常設の施設として「丹波布伝承館」を開設した。糸紡ぎ場・草木染色場・機織り場を設け伝習生を育成し、館内では機織りや草木染めの全てがわかる展示コーナー・体験コーナー・ビデオコーナーなどを設けている。また、草木染め教室や機織り講座などもある。立地が、「道の駅あおがき」にあり、見学の人も多く丹波布の普及・伝承には効果大である。

河内木綿も保存・伝承のためにも、大阪産業大学を中心に今こそ河内木綿伝承館のような施設を是非とも開館すべきと痛感した。環境デザイン学科としては、普及・伝承だけでなく再生も視野に入れたいという考えで、大阪梅田茶屋町画廊で平成15年11月17～22日まで個展を開催した。テーマは「蘇る織りのかたち」REVIVE で、ぼろぼろになって捨てられる寸前の布を裂いて緯糸に入れて織り上げ見事に「再生し蘇らせた布」を大・中・小の額に入れて織物の額を表現しました。

北河内地域における環境オブジェ設置計画

星野 暁（工学部）

パブリックアートによる都市環境デザインを北河内地域において展開してみたいとするのが私の研究課題である。その始めに、昨年は東京に新しく出来た六本木ヒルズを散策し、そこに設置されたパブリックアート群を観察してみた。1、場所の持つ特性 2、その空間の持つ様々な要素 3、周囲の景観を構成する要素、他に4、ランドマーク性 5、耐久性といった観点を調査項目にあげて観察した。

今年度は昨年度の研究報告で特に写真で掲載した3点の作品のうち、ルイズ・ブルジョワ作「ママン」と日比野克彦作「この大きな石は何処から転がって、、、」の2点と大阪を中心に展開されているパブリックアート群の中からA・ゴームリーの作品を取り上げて上記の観察ポイントの他、美術鑑賞的に直感と身体感覚による印象を主としてパブリックアートが成功する条件について考察してみた。ルイズ・ブルジョワ作「ママン」はヒルズ66プラザに設置されている。ヒルズの入り口から少し入った広場の中央、人々が最も多く離合集散する場所である。作品の形態は高さ5、6mもある巨大な蜘蛛である。8本の足を地上に延ばし正に獲物を捕らえんとする姿勢で立っている。その強烈なイメージは遠くから見ても一目瞭然である。一方その8本の足の間を通り抜けるとき、その薄気味悪いイメージを持つ蜘蛛に捕らえられるといった恐怖感とは裏腹にある種の温もりと安らぎを与えてくれる空間となっている。円形に配置された8本の細い足の柱が胴体を天井に頂くドーム状の構造を形成していて、そこを通り抜ける人々に「ママン」（母親）の懐に入るといった安らぎの場を提供しているのである。私はこの作品を雑誌の紹介で見たときと実際に作品の前に立ったときの身体感覚を通した印象の違いに驚いたほどである。それはガウディーのグエル公園に行つて味わった感じに近い。若いカップルがそこで待ち合わせていた。ランドマーク性も有したこのプラザ内で最も成功したパブリックアートと私には思えた。次に、けやき坂通りの坂道に点在するアートなベンチ作品群の中で出色の日比野克彦作「この大きな石は何処から転がって、、、」の作品について観てみたい。坂道の歩道に沿ってうねうねと横たわる彫刻された石のベンチを兼ねた作品はその場所の特性に対応して、これまた優れたイメージ性と空間性を獲得したものとなっている。しかし、このファッションブルなショッピングストリートにあつて、この作品は優れたアクセサリーの機能は発揮出来ているもののベンチの役割は十分には果たせていない。ここは車も通行人の往来の激しい道路であつて、バス停でも無ければ誰も座らない。仮に坂道で疲れたとしても一服したい雰囲気が無い。人が座りたいと思う形態は有しているものの座りたいと思う場所ではない。この坂道に10点ほどあるアートなベンチ達は個々の作品としては優れていても場所を得ていない。人の行動と心理を十分理解せずに希望的観測のもとにこの計画を打ち出したデレクターの問題である。

さて、こうして観てくるとパブリックアートとは何だろうか？私がこれまで様々な所で観てきたパブリックアートの中で最も成功している1つと思われる例を身近なところで紹介してみよう。それは大阪駅を西に500m程行った所にある。周囲には高層ビルが建ち並びこの一角だけがエアポケットのように窪んでいる。その中央にA・ゴームリーのデフォルメさ

れた人体が10体首を潜らせて連鎖し、垂直に立っている。高さにして15m程あるだろうか。周囲のビル群に比べれば高さは半分にも満たないが、鋳鉄によるその表面を錆色でまとった彫刻は崇高なまでに天に向かって屹立している。ビル群はこの彫刻を引き立てるために建築されたときさえ見える程それはその場所を美的に異化し得ている。都市の谷間のユリ？東側には黒御影石のベンチがテーブル状に緩やかに段を成し、西側にはオープンカフェなどがあって憩いの場となっている。こうして幾つかの例を観てみるとパブリックアートが成功する条件とはアートと場所の幸福な出会いにあることが解る。それには与えられた場所そのものも作品化できる作者の力量と場所の選定から作品まで総合的にコーディネートできるディレクターの力量が問われる仕事であることが解る。

1. A・ゴームリー作品



北河内地域における伝統的集落地区環境の保全と

再構成に関する研究

榊原和彦（工学部）

本研究の目的は、北河内地域における伝統的集落およびその周辺で、まとまった地区を形成している市街地を抽出し、その街路・水路網、街路・水路空間構成、街区構成、敷地利用パターン、施設分布、町並み景観、社会・文化・歴史・自然条件などの環境条件を調査・分析し、再構成のための提案を行うことである。このために、昨年度から本年度にわたり、以下のような調査・分析を行った。

- ① **大東市における“水郷”集落の調査**：大東市の低平地にあった赤井村、深野北新田、灰塚村、御領村、太子田村、新田村、御供田村、氷野村、諸福村の9ヶ村および深野北新田を取り上げ、大正期以降の土地利用（水田、集落）、水路・河川、道路の変化を図化するとともに、諸環境資源の現状把握を試みた。
- ② **道路・水路ネットワークにら見た田北河内地域の空間構造調査**：地域空間の主要な構造化要因である道路・水路ネットワークとして、河内平野二十五街道の内「古堤街道」「清滝街道」「河内街道」及び集落内道路網、寝屋川・古川に挟まれる地域を流れる水路（井路川）網をとりあげ、地図、航空写真を用いて図化した上で、それらの構造について分析した。
- ③ **“路地と井路のまち：御領”の調査と分析**：御領地区の集落・田畑・道路・水路の変遷（明治期以降）、集落内土地利用現況、環境資源分析、歴史および“水郷”の一般調査に基づく御領の考察、問題点・課題の抽出を行った。
- ④ **“伝統的集落：灰塚”の景観調査**：集落土地利用現況、屋根種類別建物分布、外壁種類別建物分布を調査し、集落全体の景観構成について考察した。
- ⑤ **微地形に着目した“寝屋川・古堤街道沿い集落：諸福・太子田”の空間調査**：集落建物と街道・路地の関係を地形の高低差に着目して整理・分析した。
- ⑥ **“歴史と共生するまちづくり”を目指した“平野屋会所”地区の調査**：深野南新田の領域とされる地区を平野屋会所を中心とする“歴史”的地区として再生するための方策を見出すための諸調査を行った。
- ⑦ **“生駒山麓集落：中垣内”の調査**：歴史的な道である「中垣内越え」の入口に位置する中垣内集落について、“物理的要因”（道、家屋、石垣……）、“歴史的要因”（神社、祠……）の調査に基づいて景観分析を行った。
- ⑧ **“おかげ灯籠”を中心とする“古街道の道具立て”についての調査**：道（古街道）の“しつらえ”の分析の一貫として「おかげ灯籠」に着目し、大東市内に現存する8ヶ所のそれについて調査・分析した。

北河内地域の伝統的な生活環境と民家に関する研究

中川 等 (工学部)

これまで長期的共同研究組織(北河内)の分担研究において、大阪市近郊として近年の変容が著しい北河内地域について、現環境の基盤構造をなす伝統的な生活環境と民家の諸相及びその形成過程を明らかにした。15年度は以前に調査を実施した伝統的な民家のうち、その後、公共施設として保存・修復あるいは再生・活用された事例研究を行った。

門真市の中塚家旧住宅は、調査時にはもと庄屋の屋敷構えを伝え、広い敷地の中程に入母屋造・棧瓦葺・中2階建の主屋がち、南面に門長屋と米蔵を構えていた。主屋は明治10年(1877)頃の建物で、6間取りを基本とし、広い土間に面して広敷を設け、土間中程の太い柱から背面に煙返しの大梁を架けるなど、河内・大和一带の地域的特徴を備えていた。中塚家の土地・家屋は門真市に寄贈され、平成10年に「門真市立市民交流会館中塚荘」として開館した。新しい主屋棟は、浦辺設計による鉄筋コンクリート造2階建の建物で、交流サロン・研修室・和室・展示室・ライブラリーなどからなり、市民の芸術・文化交流の拠点として活用されてきた。施設は、かつての主屋外観や屋敷構えの趣を継承した意匠にまとめられ、また主屋の大黒柱や太い梁、門長屋の檼の門扉などが再利用された。

枚方市の鍵屋は、淀川筋を代表する船宿の一つで、天正年間(1573-92)の創業と伝え、表は京街道、裏は淀川に面している。主屋は19世紀初期の建物で、切妻造・段違・棧瓦葺。屋根の高い東棟と落ち棟の西棟からなり、東棟の内部は中央に通り庭を設け、上手に前土間と客間、下手に竈屋土間と台所を並べる、船宿独特の空間構成を持つ。平成9年に市の文化財に指定され、その後、解体・復原工事が行われ、平成13年に「市立枚方宿鍵屋資料館」として開館した。主屋の裏手に建つ別棟は、昭和初期の大規模な和風建築で、1階は枚方宿や淀川水運の展示、2階大広間は各種イベントに活用されている。

中塚家・鍵屋ともに歴史的、景観的に地域の要となる建物であり、保存・修復あるいは再生・活用によりその文化的な価値を継承し、また個性豊かな地域環境の創造と活性化に寄与している。中塚荘は新規に設計された鉄筋コンクリート造の建物であるが、旧来の景観風致の踏襲と古材の一部再利用により前身建物の由緒来歴を一種の記憶として受け継いだ。鍵屋は復原的な整備を基本として、文化財として保存して見学に供する部分と展示・催事空間として活用する部分を合目的的に仕分けた。両者は、古建築の保存及び再生・活用の手法として対照的で、手法の間口の広さは伝統的な民家などの文化所産を個性と風格ある町づくりに生かす可能性の大きさを示唆するものと考えられる。なお、門真市立市民交流会館中塚荘は平成11年度の大坂まちなみ賞奨励賞、枚方宿鍵屋資料館は14年度の同特別賞を受賞した。

北河内地域における 里山・里地歩行路ネットワーク整備のための基礎的研究

川口将武（工学部）

大阪府全域、北河内地域における既存の歩行路ルートの実態把握を行った昨年度に引き続き、本年度は、様々な活動主体が協働して新たなルート設定を行うワークショップに参加し、合意形成のプロセスやワークショップの運営体制の手法を学び、協働型の緑環境づくりの現在を探ることを目的とした。

フィールドとなった大東市は、大阪府と協働で一昨年（平成14）から、生駒山系に関心のある地域住民、森林所有者、里山保全団体、行政関係者などで構成する「大東の山と緑を考えるワークショップ」を開催し、市民と行政の協働による「森づくり協働プラン」を作成してきている。

昨年（平成15）は、その「森づくり協働プラン」をさらに発展させ、具体的な活動や仕組みづくりにつなげていくことを目指した「森づくり講座」と「森づくりプロジェクト」の2つのワークショップが開催された。その中で私は、生駒山系に通っている小径を歩き、周囲の自然や歴史、利便施設などの生きた情報を集め、森の自然を学び、楽しむ小径ネットワークを創造しようという「森づくりプロジェクト」に参加した。以下、5回のワークショップの概略を報告する。

① 平成15年8月23日（土）13:00-17:00 大東市立総合福祉センターにて
オープンワークショップ。参加者27名。

4つのグループに分かれ、どんな道を歩きたいのか、お奨めのコースなどの情報交換、提案を行った。参加者から出された意見より5つのテーマ（生きものの径・植物の径・歴史文化の径・水、せせらぎの径・見晴らしの径）が導きだされ、3回の探索コースが設定された。あわせて、調査項目と役割分担について検討がなされた。

② 平成15年9月27日（土）10:50-15:00（散策時間：約4h）

〔第1回小径探索コース〕野崎駅→野崎観音→（尾根道を通って）→黒間池→野外活動センター→桜池→飯盛山FM電波塔→楠公寺→楠公水の水場→御机神社→四条畷神社

③ 平成15年11月15日（土）10:50-15:20（散策時間：約4.5h）

〔第2回小径探索コース〕野崎駅→堂山古墳→ホテル復活の取組地（寺川）→寺川新池→野外活動センター→辻の新池→ホテル生息地（北条）→野崎人権センター

④ 平成16年1月24日（土）10:50-13:50（散策時間：約3h）

〔第3回小径探索コース〕野崎駅→野崎観音→辻の新池→尻池・桜池→飯盛山FM電波塔→飯盛山山頂→四条畷神社→北条人権文化センター

- ⑤ 平成16年3月6日（土）10:00-15:00 大東市立総合福祉センターにて
「小径のマップづくり」最終ワークショップ。

これまで歩いた3回の調査結果（実際に歩いたコース、野帳の記録、写真）を、自然・歴史文化・景観のテーマごとにグループとなり、見どころとなるポイントや立ち寄ってほしい場所等を1/2500の地形図上にプロットし、探索マップとしてまとめ、愛称をつけてあげた。最後に作り上げたマップの今後の活用方策や小径探索のノウハウをどのように今後の活動につなげていくか等の意見交換を行った。

末筆ながら、特定非営利活動法人里山倶楽部の寺川裕子氏より貴重な資料のご提供をたまり、記して感謝申し上げます。